

AI エージェント時代の仕事設計

プロンプトの先にある、設計・判断・運用の実践知

生成 AI の活用が広がるなかで、多くの人にとって最初の入口になったのは、「AI に質問する」「文章を書かせる」「要約させる」といった対話型の使い方でした。これは今でも十分に有効ですが、実務での活用が進むほど、単発のやり取りだけでは限界が見えてきます。現実の仕事は、一回の質問で完結しません。今日の予定、昨日までの進捗、進行中の案件、今月の目標、過去の判断履歴など、複数の情報が重なりながら進んでいます。今回の勉強会で扱われていた AI エージェントの考え方は、そうした複雑な実務の流れを、AI とともにどう扱うかという問いに正面から向き合うものでした。

ここで重要なのは、AI エージェントを「高性能なチャット AI」と同一視しないことです。AI エージェントの本質は、単に賢い返答をすることではなく、ある目的に向かって、必要な情報を参照し、一定の順序で処理を進めるよう設計された仕組みにあります。勉強会でも、仕事を始めるときに、昨日の記録、Google カレンダー、案件管理、月ごとの目標を読み込み、その日の優先事項や行動提案につなげる例が共有されました。これは、AI が自律的に何かを“勝手にやる”というよりも、人間があらかじめ「何を読み、何を判断材料にし、何を返すのか」を設計しているからこそ成立する使い方です。

この点は、AI 活用を考えるうえで非常に本質的です。生成 AI が登場した当初は、プロンプトのうまさ強く注目されました。実際、今でもよい問いの立て方や文脈の与え方は重要です。ただ、今回の勉強会で示されていたのは、その先にある「設計」の重要性でした。つまり、AI に何を聞くかだけでなく、AI が何を読むべきか、どの順序で考えるべきか、どこまでを任せ、どこからは人が確認するのかを組み立てる視点です。プロンプトが一回の対話の質を左右するものだとすれば、設計は継続的な運用の質を左右します。AI を一時的に便利に使うだけでなく、仕事の中に組み込みたいのであれば、設計こそが中心課題になります。

今回の説明の中で、AI エージェントを考えるための整理として「ツール」「メモリー」「スキル」という三つの観点が示されていました。これは非常に整理力の高い見方です。ツールとは、Google カレンダーのように外部情報へ接続する仕組みであり、メモリーとは、どの情報を保持し、どの文脈を前提にするかという記憶の設計です。そしてスキルとは、その情報を使って何を行うのか、たとえば振り返り、優先順位づけ、要約、提案といった処理の単位を指します。AI を活用するとき、多くの人はいつ「どのモデルが賢いか」に目を向けがちですが、実務で安定した成果を出すには、むしろこの三つをどう組み合わせるかの方が重要です。高性能な AI でも、読み込む情報が不適切で、処理の単位が曖昧であれば、出力は不安定になります。逆に、扱うデータが整理され、スキルの役割が明確であれば、AI はかなり実用的な補助者になります。

このことは、仕事の設計そのものにも跳ね返ってきます。AI エージェントを設計するとは、突き詰めれば「自分たちの仕事は何でできているか」を言語化することだからです。たとえば、日報を書く、案件を進める、資料をつくる、といった作業も、よく見れば複数の工程に分かれています。情報を集める、整理する、優先順位を決める、言葉にする、確認する。こうした工程が曖昧なままだと、AI もどこで何を判断すればよいかわかりません。つまり、AI をうまく使えるかどうかは、AI の知識以上に、仕事を分解して理解する力に左右されます。今回、「プロンプトを書くことから、いかに設計するかへ重心が移っている」という話が出ていたのは、まさにこの意味です。AI 時

代に必要なのは、答えを引き出す技術だけではなく、業務そのものを構造的に捉える力なのだと思います。

一方で、実務導入を考えるうえでは、利便性だけでなく、セキュリティや情報統治の問題も避けて通れません。今回の勉強会でも、会社ではAIが使いにくい、セキュリティポリシーが厳しい、個人では試せても組織になると難しい、といった現実的な声が共有されていました。これは多くの現場に共通する悩みだと思います。AIエージェントのように、複数の情報を読み込み、処理を進める使い方は非常に魅力的ですが、その前提として「何を読ませてよいのか」が明確でなければ、実装は危うくなります。便利だから全部つなぐ、では済まないのが実務です。むしろ、何を渡さないか、何を制限するか、どの情報は人の判断を残すかを決めることの方が先に来ます。AIの導入とは、新しい機能を追加することではなく、情報の境界を引き直すことでもあるのです。

また、今回のやり取りでは、AIの答えを一発で正解だと思わないこと、段階的に問いを重ねること、業務で使うならファクトチェックが必要であることも繰り返し確認されていました。これは一見すると地味な話ですが、とても重要です。AIの出力は、きれいにまとまっているがゆえに、正しそうに見えてしまうことがあります。特に資料作成や分析では、その危険が大きくなります。今回も、PowerPoint資料をAIに作らせること自体は可能だが、最終的には自分が理解し、自分の言葉で話せる内容にすることが大切だという話がありました。これは、AIを疑えという意味ではなく、AIを“完成品の製造機”ではなく“思考を前に進める相棒”として使うための姿勢だと思います。下書きや叩き台の作成には強い一方、最終責任は人が持つ。この基本を外すと、AIが作った見栄えのよい資料に、人間の理解が追いつかないという逆転が起こります。

今回の勉強会で、チャットを通じて多くの質問が出ていたことも印象的でした。プロンプトをAIに作らせている、同じプロンプトの中で言葉遣いを調整している、端末ごとの差を見ながら育てている、といった共有は、参加者がすでにAIを受け身で眺める段階を越え、自分なりの使い方を模索していることを示していました。これはとても重要な変化です。AI活用の成熟は、完璧な知識を持つことから始まるのではなく、問いを持ち、試し、違和感を言葉にし、少しずつ自分の使い方を見つけていくところから始まります。そうした意味で、今回のように具体的な質問が多く出たこと自体が、このテーマへの関心の深まりと、実践段階への移行をよく表していたように思います。

総じて、今回の学びから見えてくるのは、AI活用の中心が「うまく聞くこと」から「うまく設計すること」へと移っているということです。そしてその設計には、業務理解、情報整理、役割分担、セキュリティ、確認責任といった、人間側の成熟が求められます。AIエージェントは、魔法のように仕事を代替する存在ではありません。むしろ、自分たちの仕事の構造を映し出し、曖昧さをあぶり出し、設計力を問い返してくる存在です。だからこそ、今回のテーマは単なるAIツールの紹介ではなく、これからの働き方や知的生産のあり方を考える入口として、とても価値があるものでした。AIをどう使うかの前に、自分たちは何をしているのかをどこまで言語化できているか。その問いに向き合うことこそが、AI時代の本当の実践なのかもしれません。

※ご留意ください

本資料は、Creative Guildで開催した勉強会の内容をもとに、AI（ChatGPT）を活用して自動生成されたものです。内容の正確性や完全性については保証できない点をご理解ください。ご自身の判断や追加の調査とあわせてご活用いただければ幸いです。Creative Guildは本資料の内容に対する責任を負いかねますので、あらかじめご了承ください。